

《座談会》

授業を考える

ジェフリー・L・バーグラント（高等学校教諭）

釜田 泰介（大学法学部教授）

寺川 眞知夫（女子大学教授）

——司会——

岡田 妙（大学経済学部教授）

——出席者（ABC順）——

岡田 お忙しい折にお集まりいただきましてどうもありがとうございます。
まず日常、授業について、ご経験談といいますが、日常の実感というか、そういうところからお話しいただいたらどうかと思うのですけど、いかがでしょうか。

感覚の格差

寺川 女子大学短期大学部で、私の持っていますのは四十五人ほどのクラスと、二十二、三人のクラスです。わりあい小クラスですから、問題意識のなさかもしれません、実際の授業の中で学生との関係で特に難しいということもあります。ただ、十年も二十年も教師をしてきて、ある程度常識であるというふうに思ってしまったって、学生の間で起きていることを前提にして話していると、必ずしもそうでない、行き違いができてしまうことが多いのを最近特に反省しています。

古典にかかわらせて言いますと、文法的な知識はともかく、植物とか動物あるいは日常の身の周りの物、生活の様子などの実物・実際について最近では都市化、近代化されてしまつて、感覚的にある事柄がそのままわからな

ころがだんだん少なくなってきたように思います。なるべくそうしたことに触れてその辺でいつもこたわってしまわうわけです。

岡田 確かに生活全体が都市化してしまつて、農村型、どちらかというと、田園型の生活というのが日本の生活の標準であつたために、そういう発想に基づいて書かれていたものが、若い人たちにはわかりにくいということですね。

寺川 そこで若い人たちと私なんかのその感覚のずれはもつと大きく開いているんじゃないかなという感じを持つことが多いですね。

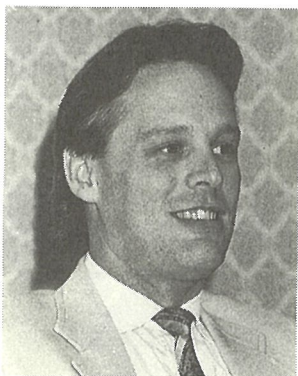
岡田 それはあるかもしれませんね。私があるときアメリカの友人に、日本の田舎を見せに行きまして、そうしてニンジンだとかダイコンだとかジャガイモだとか言っていたら「ヘエー、あれジャガイモ」なんて言われたんです。アメリカ人だつて都会に住んでいればジャガイモがわからない。日本人の私がアメリカ人にジャガイモの葉っぱを教えるなんていうことがあつたんで、いまのお話、よくわかるような気がしますね。虫のことでも、鳥のことでも知らないことがありますね。

一 クラスの人数

釜田 クラスのサイズが大きいということに教えている場合、悩みなんです。何百人もの学生諸君をどれだけ緊張させて、授業を受けさせるかということ。対話がありませんから、一方通行でやりますから、よつぽど引きつけるものがないと一時間半、いまの学生諸君をそこに縛りつけておくということはなかなかできないのです。これは昔でも同じなんですが、大クラスの場合には、結局、大きいから能率が上がらないとかそういうことじゃなくて、どれだけ魅力のある講義ができるのかにかつている面があります。だから、教室がざわついてくると、教えているほうが反省し出すわけです。自分の講義は、昔、自分が習つたような先生方の講義と比較しまして、よつぽど魅力がないんだろうというふうに思うしかなないわけです。いくら大きいクラスでも、そのクラスがあふれるぐらいの立ち見席が出ましても、立っていてでも聞こうかという講義もかつてはありましたね。そうすると、そういうものを思い浮かべますと、よつぽど自分の講義はだめなんだというような気が起

こりますよね。ですから、時にはそれに対するエクスキューズとしては、クラスが大きいからだめなんだということを言いがちなんですが、必ずしもそうとは言えません。それが一つの問題です、これは個人的な問題にもなるでしょうけど。

岡田 バーグランド先生はいかがですか。バーグランド 日本に来ていちばん驚いているのは人数が多いですね。私が選んだカールトンの大学は、十二対一という学生と教授の割合なんです。それが私が大学を選ぶときの第一条体だったのです。だから、いちばん大きな授業で二十八人だったのです。平均はだいたい七、八人です。それがゼミじゃなくて普通の授業なんです。教育というものの考え方が基本的に違います。アメリカでは教育というのは、一言で言えば判断力を身につける、自分の生き方を自分で決めていく勇氣と知識をもたせる、生き方を自分で選んでいく、これが教育だと。だからまず、大人数の授業というのはできませんから、小学校、中学校、高校、大学全部小人数なんです。そして試験の問題の出し方、論文形式の問題が多くなります。論文形式だと、裏づけは責任をもつて



ジェフリー・L・バーグランド氏

自分のほうでしないといけない。

私は同志社高校に入って四十五人という大人数にまず驚きました。それと、日本の小学校、中学、高校は、建前で人間づくりとか言いながら、結局、大学入試が最終的に待っているんです。大学入試は選択式なんです。いわゆる知識はあるか、ないかだけなんです。その選択式というのは、またアメリカと違っていて、アメリカは選択式問題でも必ずA B C D Eの中にDあたりは all of the above、上のA B Cがみんなそれぞれ正しいところもあると、そしてEというのが none of the above、この上には答えがないというのが必ず出てくるのです。それと、共通一次試験と同じようなC D E BとかA C Tとかいう全

米の大学入試テストは、採点方法としては、合っているものは一点、答えていないのが〇点、そして間違ったものはマイナス二分の一点なんです。だから、日本の場合は選択式で時間が足りない場合は、何でもええから答えたら、四択やったら四分の一が必ず当たる。

生徒に考えさせます

私が同志社高校に来たのは一九七〇年です、六九年大学生紛争でしたね、高校に来たのは七〇年です。入った年に生徒が授業料値上げに対して、授業をボイコットしたんです。非常に日本では熱烈なパワーを持った時代です。それでも生徒は私から見てもごくおとなしい。でも知識面、たとえば私の英語の教え方についてとか、英語の文章についての質問とかというのは全く出ないのです。

私から見ても授業のいちばんの苦勞というのは、一人一人の生徒に考えさせたいんです。しかし、なかなか考えてくれないんです。一方的にこつちが教えれば良いという。そして、この二十年間でますますそれが強くなっている。たとえば二十年前だと、こつちが黒板に文章を書きます。その文章について説明

すると、みんながノートにその文章を書いて、ある程度その説明を書きます。いまの生徒には細かく指示してノートの書き方を説明しなければならぬ。いちばんこの二十年間で大きな変化というのはコピーの機械です。実際に高校の授業でノートをとっている子が五人に一人に減ったんです。あとは立派なノートをとっている子供のノートを借りてコピーをとって、そのコピーで勉強するんです。だから、まさに自分というものを持たずに、授業を受けている。そして教育全体のプロセスの中で、自分というものを持たずに教育に臨んでいる。

手を挙げたら点数が上がる

アメリカの高校の授業だと、講義ですが、自分が言いたいことを生徒に言わすというやり方なんです。たとえば、シェクスピアは一五六四年に生まれたと教師が言うんじゃないかと、「シェクスピアは何年に生まれましたか」と質問し、学生が答える。それが授業の運び方です。そういう授業をやりたい。しかし、聞けばだれも手を挙げません。それを相当悩んでいて、二年前からポイント形式を始めた



釜田泰介氏

のです。生徒が一ぺん手を挙げて、私が当てて正解を出した場合には、私がエンマ帳にチェック一つ入れるのです。三回で試験点に一点プラスする。そうすると、予習、復習する生徒がふえて、だいたいそうですね、一つの質問にクラスの半分ぐらい手を挙げます。難しい質問になりますと、だれも手を挙げない。本当にわからないから。でも、本当に生き生きとした授業ができます。ただ、なかなかそういう授業をやるって生徒に言っても、最初生徒はすっごく不安なんです。一学期、二学期、ないし二年生になって初めて手を挙げる子もいるんです。

使っている教科書も二年前からかえまして、生徒がお互いに英会話をするような教科

書を選んだのです。教科書の問題も後で出てくると思うんですが、いままで英語を教える面では文部省検定の教科書と、あと外国でつくられたものと、この二つしかなかったんです。文部省検定の教科書はまず安物です。安くなければだめ。だから紙の質が悪い。カラー写真が一つもない。読みにくい。つまらない。おもしろくない。大ききも中途半端な大きき。外国のものは日本の現状のことを全く知らなくてつくられているから、教科書は紙の質がいい。カラー写真がたくさん入っている。でも、日本の英語教育ではなかなか役に立たんです。二年前から使っている教科書は、十年以上日本で教えている外国人がつくったものなんです。これは文部省検定教科書までいきませんが、文部省がある程度入っています。いままでの英会話の教科書のように、「あなたのきよう着ているシャツは何色ですか」などと、見たらわかる、聞く必要がないことは聞かないんです。本当に二人がわからないことをお互いに聞く。簡単に言いますと、一つの絵の半分は一人の子が持つて、半分はもう一人の子が持つて、お互いに聞き合つてその絵全体をかくようなものなんです。あれを

やり出してから生徒は本当にアメリカみたいな授業になって、たいへん楽しくやりやすくなりました。いま苦労しているのは点数を取りすぎている子、できるだけ同じ子に当てないようにします。良くできる子は一学期間で百点を越えてしまいます。だから、いまだにやる気を起こさせすぎて困っているのです。(笑)。

岡田 やる人とやらない人とのギャップが、大きくなる。

バーグランド だから中間試験、期末試験で一けたとか十点台の点をとる子は、一学期間どころか、一年間に一度も手を挙げないんです。ちよつと予習、復習したら点を取れるのに全然しない。

授業にもつと工夫を

岡田 次々そういうふう新しい試みを次々授業の中で重ねていくということは、教師にとつてもかなりエネルギーのかかることなんですけれど。

バーグランド だから新しい教師をたくさん入れないといけないのです。その人たちと一緒になつて、又その新しい先生方から、私

も何かを学び、変わってゆきます。

岡田 やはり教えるということにエネルギーをかけていかなければいけないということなんですか。大学のレベルではこのところがなかなか難しいところじゃないかと思う。

寺川 確かに新しい問題に柔軟に対応していくということは非常に大事なことでですね。

ちよつと話は違ふかもしれませんが、学生の反応についていいますと、演習などでは自分が指名されたときは、非常に丁寧に調べてきて、いい報告をするわけです。ところが、自分の担当が終わると、自分には関係がない人が発表していても、聞かないで横の人とし



寺川眞知夫氏

やべつたりする。後で討議しようとしても、だれも反応しない。だから結局、ぼくがコメントを加えるという形、発表者と教師との対応だけで終わってしまうわけです。

以前にアメリカのハーバードの、ロースクルの授業がテレビで放映されたことがありました。教師が学生に一々質問しながら全部発表させていく授業風景が印象的でした。その前には非常にたくさん読むべき課題図書が課せられていて、それを読んだ上で授業を受けるという形だったと思うんです。しかし日本の場合、学生にそれだけ本を強要しても、図書館の設備の問題、学習時間の問題、いろんな面で必ずしも一緒にはできないだろうとは思います。けれどもああいうのを見ると本当にうらやましい。日本ではどんなふうに工夫すればやっていけるのだろうかと思つたことがありますね。

そこで自分の授業の型を振り返つてみたとき、自分の先生に習つた授業の型を基本に置いて、いくらか自分の研究とかそういうもので新しい工夫をしているだけではほとんど変わらない。大学の授業の教授法はどうあるべきか、どうすれば効果的に教えられるかとい

うようなことは、あんまり日本では議論しないですね。全部個人の力量であるとみて、他人の授業のやり方には口をはさまないというやり方ですから、互いに授業方法について研鑽し合おうというようなところはない。むしろ触れまいとする。これはわれわれ自身が反省しないといけないところかもしれません。もちろんその必要はないというふうに言われることもかもしれません。ただ、学生との関係で言うと、われわれがある程度知っておけばうまくやっていける部分もあると思うのですけれども。どうでしょう。

ソクラテス型教授法

岡田 釜田先生がさつきおっしゃつたように、大きなクラスでもしじゅう改善していこうという努力はしておられると思うのですが、それはみな教師が孤立して、独りで工夫を重ねているんじゃないかと思うんですけれど、どうでしょうが。

釜田 その問題は大きな問題ですね。ちよつとその前に、いまおっしゃつた、恐らくアメリカの映画というのは「ペーパーチェイス」ですね、ハーバードのロースクルの授業風



岡田 妙氏

景を描いた……。

それはさつきバークランド先生が判断力をつけるというのが教育の目的であるとおっしゃいましたね。あれと関係あるんです。だから「ペーパーチェイス」の出だしは、ロースクールのある授業を非常に誇張しているんですけど、担当の先生が自分は答えを言わないということから始まるのです。先生は質問、質問なんです。これはソクラテスがやった流儀なんだということ、質問、質問、で学生自身にその回答を見出させる。これは確かにロースクールで使っている伝統的なやり方なんです。同時にカレッジでもそれを行っているのです。一九一〇年代にアーモスト大学からハーバードロースクールへ行った学生につ

いてこんな話が残っているのです。そのころちょうどアーモストで、ミクルジョンという哲学者が十年ばかり総長をやってまして、それがやっぱりソクラテスのやり方で学生を教育したのです。ロースクール側にはパウンドという立派な先生がおられたのですが、これがびつくりするのです。カレッジでその訓練を受けた学生がロースクールへ来ますね。何も準備は要らない、すぐ入っていけるとア大卒業生の優秀さに驚いたという記録が残っているのです。

このような教育は映画でも見られるようにかなり大きなクラスでも、やろうと思えばできるのです。できるのですが、問題はさつきおっしゃった、いわば大学で——大学も含めて学校という所で、どういう教育をするのかということ、学校教育の目的は何か、ここで何をやるのかということがはっきりしているかどうかということなのです。

何のための学校教育か

バークランド 特にいま大学はもう義務教育の延長線、高校というのは九七%ぐらい、また大小は七五、六ですか、もう八〇に近い。

そうすると、先生の魅力で求めていくんじゃないかって、これはみんながやっているんだから、自分も大学へ行かんと格好がつかないとか、収入面ではいい暮らしができないとか。そうすると、大学の授業のやり方が変わるでしょうね。

釜田 変わりますね。それから、もう一つは、昔は学校という場が知的なものに接触するといえますか、そういうものを得る、まあ唯一とは言いませんけど、主要な場だったということは言えますね。大学へ行けば有名な先生の講義が聞ける。そこへ行かないと聞けないという。ところが、いまはもうね、テレビはある。本はたくさん出ている。雑誌には同じ先生の文章が載るという時代ですから、べつに学校の門をたたかなくても学べますよね。ですから、完全に機能が変わってきた。そういう社会の中でなおかつ学校とは何かということですね、学校は何をするところなのかという、それと関係してくるのじゃないかというね。

バークランド それはアメリカではずいぶん、戦前ぐらいですか、その同じ悩みにぶつかって、義務教育ができて、大学が義務教育の延長線になってきた時点でそれにぶつかっ

ていく。大学は、いろんな違った生き方をしてきた学生を入れることによって学校が生き生きしてくるということに気がついたのです。ほとんどのアメリカの大学というのは、成績というのが一つの基準なんです、たとえば十人以上のきょうだいがいるとか、大金持ちとか、全然お金がない、親がいらない、海外生活の経験がある、スポーツがよくできる、いろんな違った基準の子供を何人かずつをピックアップして、その子供たちと一緒に入れると、その子供たち同士が先生の刺激にもなり、大学全体を動かす力になる。日本というのは、やっぱりこれからの時代というのは、東南アジア、また欧米諸国と、だんだん本当に違った人種を入れることによって大学は変わりますか。

釜田 それは変わるでしょうね。

同輩からも学ぶ仕組み

岡田 お二方のおっしゃったことは非常におもしろいところを突いていると思うんですね。一つは教えるこうというのは先生から教わる。同輩から学ぶということは必ずしも計算に入っていない。それで、いまバングラ

ンデ先生がおっしゃったのは、教師から学ぶという要素もあるが、同輩というか、同じ学生同士が学び合う要素が大きいんだという、アメリカの教育に立脚しているところがあるんじゃないでしょうか。

釜田 そうですね。日本は伝統的に対話、話をするという、この伝統はあまりないんですね。だから、学校でもさっきおっしゃった質問、それに対する対応、まだ十分ではない知識でも聞いていくという、対話している中でだんだんそれが完全なものになっていくというそういう発想はないですね、日本の教育の中で。

岡田 それは教えることもできるでしょうね。

寺川 ただ、仏教なんかの論議は経典の叙述形式にもあるのですが、質問して先生に答えてもらう、対話形式で先生からむしろ逆に教える引き出してくるという、形がありますね。それから、宣長などでも真淵に質問状を出して、その答えを受けるといふ形をとります。ですから逆の形式ですね。

岡田 学生さんに発表させていると、ほかの学生さんたちは自分に関係ないような態度

をとる。発表している学生さんは、先生に対して発表しているんであって、クラスメートに対して発表しているんじゃない。クラスメートの方も間へ入るべきではないと思っ

まう。私はたとえば英作文をさせましたら、一度書き直させて、クラスメートに読めるような体裁にして、次の時間はお互いに読んで、一筆コメントを書かなきゃいけないようにしているわけです。そうすると、あつ、仲間から学ぶんだということがわかって、その次からは仲間に対して書くようになる。それから、たとえばちよつと小さいクラスで、一人の学生さんに発表させるときに、みんなに質問とコメントを書かせるのです。書かせたものを集めて、私が整理をして必ず本人に渡すのです。そうすると、仲間へ何か言われたり、質問されたり、仲間から学ぶんだということがわかった、あとはうまくいくようになる。ところが、教えなきゃだめなんです。日本の場合は。

ある学生さんがサマープログラムで夏、アメリカへ留学をしまして、帰ってきて、外国の学生さんはクラスメートの発言に対して反

応をする、先生の言うことを聞くだけじゃない、
くてクラスメートの言っていることを聞くの
だ。自分がクラスで何か言ったら、先生は何
も言わないんだけど、クラスメートが何だか
んだと質問してきて驚いたという、これはい
いことを学んできたと私は思ったのですけ
ど、これをひとつは培わなきゃいけないとい
うこと。バグランド先生がおっしゃったよ
うに、すでにいまの若者はそうなりつつある。
釜田 いまだいぶ変わってきてますよ。

対話の場を

バグランド 大学の生きがいはサークル
とかクラブとかで、そこで対話を求めている
のですね。

岡田 だから、教室の中でもクラブにかわ
るような対話の場があれば、学生さんは喜ん
でクラスへ来るんじゃないかと思うんですけ
ど、どうでしょうかね。

寺川 どうなんでしょう。学生の出席とい
う面で考えますと非常にいいですね。特に
女子大だからかもしれませんけれど。何か事
情があつて休む子以外はあまり欠席しないの
です。出席が非常にいいですね。私たちの大学

のときは休むのはあたりまえで、先生と一対
一で授業を受けたこともあります。ただ、そ
の場合も先生が講義されるのを私が聞くとい
う形でしたが。

岡田 どんなに人数が少なくても、べつに
対話にならない。

寺川 ええ、講義では少なくともそういう
関係でやっていたわけです。しかし、近代文
学漱石や藤村の演習ですと、それぞれ関心持
つて、ある程度読んでいますし、異った学年
は、たとえば二、三、四年の者も、あるいは
卒業した人も入って、二十人足らずですが、
かなりいろんな意見が出てきましたね。それ
ぞれ力が違いますから、初心の者が発表しま
すと、年長の学生が質問したり答えたりする。
そういうやりとりもありました。しかし、ち
よつと大きな教室なんかになって講義形式に
なつてしまえば、先生が質問や意見を求めら
れても黙っている。

演習は今も数は変わらないと思うのですけ
れど、先生がさつきおっしゃったように、一
応レジメをつくつて学生全部に配つて、それ
から学生が発表しても必ずしも反応しないとい
うわけですね。問題は、自分で選べず、学

籍番号で割りふられていますから、お仕着せ
で授業をとらされたという感覚を学生は持つ
ているところもあります。来年度は選択制に
変えていくことにしているのですけれども。
バグランド 高校はみんなそうです。高
校は全部必修なんですよ。

寺川 そうですね。短期大学でもそういう
部分があります。だから、興味の対象でない
と、積極的にやっていくという意欲が生ま
れないのかもしれないですね。しかし、その
ときに結局学生の問題としては、まあ知らな
い新しい自分でそれを勉強していく中でしか
自分の力を養おうとかという姿勢がもう少し
あれば、もつと積極的になれるようにも思ひ
ます。今の子は自分の興味の範囲を限定して
いる面もあるんじゃないでしょうか。だから、
自分の決めた枠を外れるともう要らないと決
めてしまう面もちよつとあるのじゃないかな
という感じかもしれません。

バグランド 私たちの……私たちが私が
いちばん若いのですけど、私たちが子供の時
代、高校、大学の時代を過ごしたのは、物質
面ではいまの子たちほど恵まれてなかったの
です。いまの子供たちというのは、わりにも

ので人生をはかる、いわゆるブランド品とか電気製品とかそういう何を持っているかで。

大学を選ぶとき、または自分の学部を選ぶときには、将来の就職、収入面で役に立つものを望む。だから、いま英文学部離れがあるのです。英文学部はよくない。そこではもう少し会話とか演習をやっている短大のこのほうが魅力的や、就職がええという、女の子はみんなそっちのほうに流れていく。ああいう現象というのは、自分の人生を全部ものではない。そういう生徒が高校に学んでくる。私が教えている英語演習というのは非常に人気がある。みんな一生懸命やる。でも、文部省検定の教科書のたとえば文法の時間、あれは全然人気がない。だから自分の知識をふやしたいとか、ものには関係ないのはわりに切り捨てるのです。だから、さっきの一人が発表するときにほかの学生——そこでいい質問をすると点をプラスしますよという、こういう非常に具体的な点取り式にすると、もうどんな質問しますよ。だから、いまの学生というのは、なかなか自分の中からやっていくという意欲が出てこないのですね。

知的好奇心を育てる

岡田 つまり好奇心を植えつけるとか、育てるとかいうことが教育の目的にがっちり置いてないわけなんですね。小さいときから、好奇心をはぐくんできていこうというその視点が……。

バーグランド 記憶型教育です。

岡田 大学では、好奇心の育っている人だけが大学へ来てるんだという前提のもとに大学の先生たちは教えるものだから、結局、大学を卒業するまで一度も好奇心をはぐくむという機会に恵まれずに——。昔はどういうふうにして好奇心をはぐくんできたのでしょうか。

寺川 どうなんでしょうかね、その辺は。大学に來ている子たちの層でも関心も非常に広がっていることは確かですね。

岡田 好奇心がないのに大学のようなところへ入ったら、本人はたいへん苦勞でしょうね。

バーグランド いまの子供たちにはテレビというのはすごく大きいんじゃないですか。

岡田 ああ、受け身になった。
バーグランド ぼくは日本という国はどう

いう国なのか、知りたくて来たのですよ。いま、アメリカの小学生でも日本のことを知りたいのだったらビデオを借りて日本を見て、ああ、日本でこういう建築物があり、こういう歴史があり——。テレビを見ながら、日本に來なくていいのです。

寺川 ぼくもそれに関連して思うのは、最初に触れましたが、知識そのものは本やテレビや写真などで沢山もついています。しかし実物や實際は知らない。たとえば『万葉集』の中にハリという木がでてきます。ハンノキです。たまたま大学の前にその木があったものですから、私は枝を折って持って行つたのです。二月に咲く花の蕾がついています。ところが、葉が紅葉しないで汚くなつていたので。それを学生に渡して、「回しなさい」といったんですが、「汚ない」といって手に取らない、そういう子がいるのです。だから、美しい写真は見ても実物を見ようという気がないのでですね。私は田舎で育って、何でもさわってみるとか、においをかぐとか、場合によつたら、なめてみようとかそんなことをした。そういうのじゃなくて、ただ単に見る、あるいは聞いているといった反応の仕方、

実際さわってみることはしないですね。私なんか反省するのは、子供が汚いもの「汚ない、さわるな」といった(笑)、教育をしている面はあるのですけど。学生には自分で確かめようという気がないですね。

岡田 そうです。体験学習的な要素も欠けているということですね。

いまの子供はもの知り？

釜田 確かにいまの子供のほうが知識量は、かつての学生よりはるかに多いですよ。

バーグランド 教養面では。

釜田 そう、知識では。しかし、おっしゃったように、自分の本当の関心からそういうものを持ったとか、あるいは何か感激を通じて得た、そういうのが少ないですね。知識としてはそれはもう小学校のときからあまり空白なしに来てますから、すごいものを持っているのですけど。頭ではいろんな知識を持っているのですけど、なかなか感激しないですね。

バーグランド 感激というのは、やっぱり外にある木とか植物とか先生とか何であろうと、自分とのつながりで感激するのです。自

分というものがなければ感激はない、感動がないんです。

釜田 質問しないとか感激しないとか対話がないとか言いましたけれども、それがパツと出るいい場面があるのです。それは実は教室ではないのです。たとえば、ゼミで旅行に行くとかパーティをやるとか、そういうちょっとリラックスするときですよ。それこそ何もちがが構えてないときですね。

岡田 質問も的を得ているしね。

釜田 質問はいいこと言いますしね。だから、ぼくはときどき思うのですけど、ゼミを二十八回ぐらいやるとしたら、月に一回ぐらいは食事を一緒にして、それを通じて話し合うという場、そういうようなものをちよつとふやしてやらんと、そういう体験をする場がないのですね。教室での体験はもう十二分に受けているのですよ。高等学校までたくさん教室でやっているのです。しかも小さいクラスで受けてきているのですね。だから、大学に入って大きいクラスでリラックスしている面もあるのですよ、初めて体験してね。ただ、それがあそこを活用するだけの何といえますか、そういう態勢がまだできていないのです

ね。だから、ただ、小さいクラスから先生の目の届かない大きいクラスに移ったということとでリラックスしているだけで、何も講義を聞こうという姿勢にならない。だから、あれではちよつといまの子供はかわいいそうなところがあるのでですね。何かこつちが工夫して、もう少し変えますと、いいところが出てくるのです。

岡田 そうですね。いまそこが大事なところだと思う。何かを工夫して少し変えていくと、いいところが出てくる。

入試はいかにあるべきか

バーグランド 入学試験制度を変えないと変わらないんです。私は子供の時代というのは遊びというのがすごく大事だと思うのです。田舎の子でも都会の子でも、やっぱり自然のものをさわったり見たりするんですよ。そこで人間同士の、学生が食事するときに、先生と人間になって話ができる。あれが子供の時分の遊ぶときにできてる面がぼくはものすごくあると思うのです。いまの入学試験制度というのは詰め込み式、暗記型教育ですね。子供が本当にいっぱい暗記せんといかん

から、本当の遊び、本当の自分の好奇心に発して勉強する時間が全くないです。

岡田 そのところはとうとうふうに改革したらしいか。

バーグランド 小学校、中学、高校の授業でこれ、改革せんといかんのじゃない。

岡田 入学試験そのものが、詰め込みで何を覚えたかじゃなくて、本当に子供らしく好奇心にあふれて育った人を選んでいくような入学試験になれば、そういう入学試験ならいいんじゃないんですか。

釜田 ただ、ちよつとあれですけど、いまの中学へ入るときはこっちはあんまりタツチできないにしましても、中学、高校、大学と学内の場合、つながってますよね。同志社は一貫教育ということを常に言ってるわけですよ。ぼくは常々思うんですが、一貫教育というからには、入ってきた学生を、これをまさにさつきから出ている日本のいままでの教育のやり方ではなくて、本当に判断力をつけるというか、中学、高校、大学で学内については連携して何かやるべきじゃないかと思うのです。なかなかそういうことを話す場というのがあるようでないんですね、同じ学校に

いながら。

バーグランド それに高校の先生としては、大学が何を望んでいるかというのは、知識面で試験で入ってくる子供と同じぐらいの知識を持つ学生がほしい。そしたら、こっちは受験勉強にかわる勉強をさせんといかんです。いわゆる文部省検定の教科書を使って、詰め込み式でやらないと大学には怒られるという気持ちなんですよ。

同志社に一貫性のよさを

釜田 そのところがね、大学と高等学校との、まあ中学含めて、恐らくぼくはあまり話したことがないんですよ。何をやるのかということね。形の上ではときどき一貫教育ですなんて言っているんですけど、本当にいまの時代、しかも同志社という環境の中で、これだけの何百人かの子供をどう教育するのかということとをあまり真剣に話し合ったことがないのです。

岡田 本当は教学上のいちばん大きな話題ははずなだけんど。

釜田 ここでもしてきなかったら、対外的にわれわれが外の日本の教育の世界を論じて

もちよつとあれですよ。

岡田 同志社の中でできないことを、社会全体に要求しても。

釜田 自分の足元はどうなっているかと……、と言われますよね。ぼくはそういう場を頻繁に持つべきだと思うのです。大学と高等学校だけの関係で見ましても、本当に年に一回ぐら何か……一回か二回ですか、推薦で学生が上がってくる前に形式的にお会いして、受け入れ人数についてお話をするという場はありますけど、四月ぐらいいに。そんなんはどうでもいいんですよ。そうじゃなくて、もつと基本的なことを時間をかけて頻繁に会って話さんといかんですね。ぼくは前からそう思っているのですけど。

学校はどこまでやるべきか

岡田 体験学習のようなもの、好奇心をほくむというようなことは、全部学校がやらなくちゃいけないのでしょうか。つまり、学校はどこまでやるべきなのか、授業は何をするべきなのか。

寺川 体験学習は、なかなか授業の中では簡単にできないですね。感性を養うことは、

ある部分家庭での育て方の問題とかかわっていると思いますね。

岡田 そういふ気が何となくしますね。つまり、学校でできることと言えば、せいぜいサンプル、枝を一本持つてくるとか、あるいはたまに講義のかわりに美術館へ連れ立って行くとか、ちよつと校庭の中を歩いて、「これがハンノキですよ」とか、というような、その程度が限界で――。

寺川 実地踏査とかですね。われわれの分野ですと、たとえば明日香に行くとか、山の辺の道を歩くとか、まあそういうことですね。

岡田 そうでなければテレビで、いろんなものを見せる、ぐらゐのところが関の山でしょう。そうすると、本当の意味の感激を伴うような体験学習というのは、たとえば欧米先進諸国でしたら、長い休暇の間に家族ぐるみでキャンプに行く、あるいは青少年向けのべつの教育機関でいろんなそれぞれの子供の体力や能力や、親の好みも含めて好みによって家庭のアイデアや権限の中でそういう機会をつくっているんじゃないんでしょうか。

バーグランド いまアメリカで大きな動きとして、義務教育というのは全員が同じ枠に

はまってしまう。その義務教育についての疑問から家庭学習――学校に行かないというのがありますごくふえている。私の弟は子供を学校に行かせてないのです。いまの授業形式を考えていくと、私たちの授業形式というのは義務教育から出てくるものです。いわゆる義務教育というのは、それが日本では少数の四十五人、大人数の六百人、人数関係なしに全員が同じ要求を持っている、全員が同じニーズを持つている。そしてこっちがその同じ要求に対して一貫のものを与えるという、その義務教育の考え方が大きく教育を運営しているような、支配しすぎているような感じ。

岡田 つまり学校へ行く権利というものが一応確立されたら、今度は学校へ行かない権利というとおかしいけれど、学校からの解放というのかな、そういう発想も必要で、教室というものの果たす役割というものを、もっと柔軟にとらえていかなきゃいけないかなと思うんですがね。

バーグランド ほとんどの中学校は制服とかいんな校則について、子供たち自身が考えて、生徒会の場で、制服や校則について考

える場を学校が与える。それが全くないんです。学校が一方的に校則を決めて、押しつけて生徒にそれをやらしている。寺川先生がさっき言いましたように、全部必修科目になっていると、生徒がどういふ授業を望むか、とか何を勉強したいかということを考える場がない。

科目選択の幅

寺川 それと、もう一つは必修科目の中でも、分野選択ができれば、それはちよつと緩められるのですけどね。先にも述べましたが今は、最初から出席番号によって決められる、先生も、授業内容も全部。しかし、古典文学でも時代によって分かれていきます。そうすると、教員がどの時代を専門にやっているかが問題になる。私は上代をやっていますので、私のところに来た学生は近世文学をやりたいと思つても、『万葉集』とか『古事記』しかできないことになります。

岡田 それはやつぱり教師と学生さんとの人数の問題が、いまさつきカールトンは学生十二人に対して教師が一人と。そういうふうであれば、かなり自由にやっていけるんだろ

うけども。

寺川 四年制大学の場合は、自分で選んで行ける形になっています。しかし、短大の場合はそれが十分でない。来年度からは学生に前もってどの授業を受けたいか選べる形をとつてます。もちろんその場合でも希望どおりいなくてあふれてしまう人も出てきますけど。

岡田 それはそうですね。カールトンのようなところだったら、それはどうだったのですか。やっぱりあったのですか、あふれる人というのは。

バーグランド 一斉に体育館でするのでよ。本当に自分が絶対この先生のこの授業をとりたいと思ったら、一番にその先生のとこで登録するのです。それで、どっちでもいいと思うものは後回しにするのです。だから、みんな一斉に列を組んで、場合によって体育館があく前から外で待っているのですよ。

岡田 ということは、仮に一对十二であっても、そういう現象が起こるということ。日本のような比率であれば、これはもつともつと起こるということを予測しなければいけない。だから、好奇心があっても、自然な好奇

心を学校の間では必ずしも満たしえない状況もあるわけですね。

教室そのものも改善を

岡田 先ほどこちよつと教育機器の話が出てきたんですけど、物理的に絵も字も何もかかってないような非常に殺風景な日本の典型的な教室は、対話するのにはふさわしくない。もつとゆつたりした環境であつたら、それだけでずいぶん和らぐんじゃないかと思うのですけれども。機器というと、すぐに私たちはテレビとか、OP（オーバーヘッド・プロジェクター）とか、そんなことばかり考えるんだけど、もう少し教室そのものも変われば……。

釜田 確かに先生おっしゃったように、教室というのは大事ですね。たとえばもう少し、大きな部屋で、壁に卒業生で活躍した人の写真とかが飾つてあるとか。

岡田 しじゅうじやなくても、たまにはね。釜田 特にゼミナール、演習に関してはそういう教室というのが必要ですね。演習用の教室がないのですよ、この大学には。

岡田 たとえば予約制で月に一回はそうい

う教室が使えるとか、そして、少し紳士、淑女として扱われて、リラックスした雰囲気の中で清談をするとか、知的な会話を、というようなことも今後は考えてもいいんじゃないかという気はしているのです。

釜田 おっしゃるとおりですね。大人にかなかならないのです、本当の意味で。年齢的には成人しますけど、そういう意味でも先生がおっしゃった知的な会話といいますか、そういうことをやる、そういうことを訓練する場が大学にないのですよ。

岡田 私もそんな気がするのです。私の英語のクラスでも、ときどき留学生を呼んできて話をしてもらったりするのですけれども、そのときに、たとえばベンチが固定であるとぐあいが悪いから、ベンチの動く教室へ一時的に教室をかえたり、それだけでも学生さんたちは私が物理的な環境を考えているということを知ってくれるわけなんですけど、そういうときには、せめてそんな上等でなくてもいいから、ジュースぐらい敷いたところへ入れてもらえれば、それだけでもずいぶんよくなるという気がするのです。

寺川 演習は、テーブルの部屋が望ましい

ですね。田辺にはなくて考えてほしいと希望しているのですけどね。普通の教室を演習室に使うと、やっぱり学生が前に出て発表しても、いわゆる向かい合いの形だけなんです。発表者に向かい合っている学生は互いに顔がみえない。テーブル形式ですと、学生の反応の仕方もまた変わってくると思う。私の大学時代も演習はテーブルを必ず囲んでのものでしたから、発表にしましても聞くにしましても意見は出し易かったですね。教室のありようも大事だと思います。

バーグランド カールトン大学の授業では、先生が教壇みたいところに立つて講義しているのは一つしか受けてないのです、ぼくは。二十八人が、一番大きなクラスです。あとぜんぶ、いま先生が言ったようにテーブルを囲んで。ずいぶん違う。

釜田 確かに違いますよ。

バーグランド 日本の場合、教室の管理は学校がします。アメリカの場合、一人の先生が自分の教室を持って、生徒が移動しますから、先生は自分の好みで、「ことしの壁の色はみんなどうする。今度の日曜日に塗りたい人は来てください。みんなで塗りましょう」と

呼びかけ、それで興味のある人は行って塗るのです。私が受けた年は四つの壁をみんなちよつとずつ違う色にしたらどうだろうって。それで自分たちで塗ったのです。そしたら、自分も参加したという気持ちになります。先生が植木が好きやったから植木物をいっぱい置いて、自分の机があつて――。

中学校、高校というのは、なかなかいまの生徒というのは図書館を利用しないのです。同じ人が週に四、五冊ぐらい読んだりするのですが、高校三年間に一度も図書館を利用しない子がたくさんいるのです。アメリカも同じような問題があつて、各教室に本屋さんで本を売っているグルグル回るやつがありますね。あれに図書館の本を置いて各教室に置くのです。借りたい人は中にカードがあります。そこに自分の名前を書いて、教室の出るところに図書館カードを入れる箱があるのです。そしたら、もつと簡単に本を借りに来る。しかし、教室の色とか、極端な場合、なかなか日本では窓を洗わないのです。汚い窓なんです。同志社高校は典型的やと思うのですけれど、なかなか窓を洗いませんね。そしたら、教室は明るくて温かくて、場合によってはカーペ

ットがあつて、本物の木のテーブルがあつて、そういう教室の雰囲気を全く考えずにこういう授業の話をします。やっぱり授業というのは、ある程度その物理的な環境というのが大事じゃないかと。

岡田 私が学生時代の同志社はいろんな教室がありましたね。いつの間にか、非常に画一になつてしまつて、まあやつぱり費用というところもあるんだらうと思うのですけれど。

教科書の役割

ちよつと教材のことに移りたいと思うのですが、教材ではどういうふうに変化というか、どういう工夫、あるいは今後どうなるであらうというような、釜田先生からは分量がふえたというお話がございました――。

釜田 さつきそういう資料――法学部の学生が読む法律、判例、これは毎年毎年増えているわけです。同時にテキストの数も非常に増えてきているのです。昔に比べると。昔は各分野のテキストというのが本当に限られていて、もつと前は恐らくテキストもあまりなかったと聞いています。だから教室へ行つて、聞いてノートをとらないと、それがないと外

へ行ってもカバーできないというそういう時代が最初あったらしいです。それから、われわれのころはかなりテキストは出てましたが、いまはもつと出てますからね。いまはだから、学生諸君はある意味ではあんまりたくさんある中にほうり込まれて、結局あまり読まないんですね。どれを読んだらいいのかわからなくなっているということもあるかもしれません、量が多すぎる。それから、テキストがそれだけ出ているわけですから、教室の授業との関係で言いますと、テキストと同じような授業であれば、そっちを読んだほうがいいという気にもなるでしょう、学生は本を読んだほうがいいと、それが全く同じことであればね。ですから、テキストというものと教室との関係をいつでも考えるのですけど、これは同じことを再現したのであれば無意味なという気を与えますよね。ビデオなんかを使えば、自分独りでもつと詳しく学べる時代ですから。そうすると、教室でのテキストというのはいわば一ヒントといえますか、与えるということです。教室ではもつとそれ以外のことを与えるということになります。

岡田 教科書というのは、つまりたくさんあるうちの一つの情報源にすぎないと。昔のように教科書さえ端から端まで見ておればよいというのではなくったと、そういうことです。

釜田 一つの情報源ですね。テキストも微妙に中身が違ってますからね。ですから、それを踏まえた上で本当に、さつきおっしゃったその考える力、判断力をつけないと意味がないのです。テキストを丸暗記しましても、応用力がないと使えないのです。結局は自分で判断するという力なんです。バランス感覚といいますが、そういうものをつけてどんな問題に直面しましても、妥当な解決というのを見出せるそういう力をつけることですね。だから、いわば法律を勉強したからそれを使つた職業につく必要ないんですよ。そうでなくて、どこでも応用がきくんです。応用がきくんですが、どうも昔からアメリカでもカレッジの段階で、法律の資料を使つてそういう訓練をやるかというふうに考えた教育者もいるらしいですね。あれは社会でいつでも起こっていることです。多様な問題がそこに登場するから、資料としては非常にいいということで、ロースクール以外のところで

も、そういうものが教材として使用されていたというような記事も読みますから。だから、法律の教育でこれだけ読めばもう全部完璧ということはありません、世の中は動いていきますし。そして学生が巣立って出ていく時代の社会はまた変わってますしね。それから卒業してからの社会は長いですよ。そつちが長いですから、そこに全部対応できるということになりますと、一冊本を読んでもうけ間に合うということは絶対ないですよ。

判断力のある国民を

バーグラント いまの法律と道徳とのつながりというのは、たとえば移植手術とか人工受精とか、いろんな微妙な問題がからんできて、どこまでが法律で、どこまでが道徳かというような、大変じゃないですか、いまの時代。

釜田 そのとおりです。ですから、判断力をつけることが重要になるのです。それを身につける一手段としては法律の資料もそのひとつですが、しかし、ほかの学問分野も別の方向からやられるだけで、最後的には大学教

育において、まあ大学だけではなく、全部の学校教育において目指していることは同じじゃないでしょうか。結局、同志社に立ち返って考えますと、「設立の旨意書」に全て述べつくされていると言えます。

バーグランド 立派な、いいこと書いてあるんですよ。

釜田 あの文章が書かれたのは百年前の日本が議会をつくったり、憲法をつくったり、法律をつくったりしていくという欧米型のやり方を会生活をやったという時代なんです。そのときに、新島先生はすでにそれを百年から二百年運用してきた。アメリカやヨーロッパの社会を見ておられたわけですね。判断力を持った国民がそれを支えていなければ、こんなものはつくってもだめだということなんです。だから、同志社教育の目的ははつきりしている。授業問題を考えるときには、学校において何をするのかということを、みんなが常に立ち返っては確認しながらやっていかないとだめだということなんですよ。

学生にしゃべらせたい

ぼくも大教室でやってますと、大教室で学生が後ろのほうでしゃべり出しますと、うーんと思うことがありますよ。じゃ、小教室がいいかという、四十人、三十人、二十人だったら、学生はじゃ、しゃんとしているか。そうじゃないんです。二十人でも一対一でも、その学生に感銘を与えないということはあるんです。ですから、人数というのはあんまり重要なことでもないかもしれん。それは能率は上がるか、上がらないかということありますけれども、そうではなくて、大きい教室でもあとの手当て、小さいクラスと組み合わせることによって、幾らでも訓練できるのです。しかし、ぼくはいまいちばん欠けているのは、学生にリラックスしてしゃべらせる場です。それがありませんよ。一方通行の授業は小さいときからたくさん受けてますよ。だから、レポートとかを書かしたり試験をいたしますと、書くのはうまいです。短時間にまとめる、レポートを何日までに出せと言ったら、きちつと出しますよ、いまの子は。ある程度

のものをまとめて。

岡田 提出したものに對してだれかが質問をしたり批判をしたり、それに対してまた自分はこういう趣旨で書いたのだということ、を、説明したり、そういう場はない。

釜田 ないです。だから、ぼくもゼミナールのやり方を変えまして、前もって課題を出して、質問をさせるのです、質問だけ。あるときは報告もしなくていいと。質問を受けて答えるという方式にしたのです。

岡田 そういう場にしていかなくちやいないということでしょうね。

釜田 そうすると、おもしろい質問をしますよ。いままでテキストのどこにも書いてない、私も気づかなかったような実によくポイントを出してくるのです。みんなうなづいて答えない。テキストを探してもどこにも回答がないというようなのが出てくるのです。だから環境、そういう場を幾つか設けるといふことですね。素質はありますよ。十分にそれだけの知識がありますしね。

岡田 ただ、最初におっしゃったような教えをこうだけの態度ではないということですね、いまの若者は。

釜田 ないですよ。

岡田 やっぱり本当は知的な対話というものを求めている、そのような物理的な環境と、指導があればそういうほうへどんどん行く。

釜田 もっと伸びますよ。

岡田 もっともつと活動型ですか、活動的な授業を望んでいるということですね。

釜田 もっと伸びていきますよ。学生はいい素質を持っていますよ。

行動的な学習の場

岡田 ただ、寺川先生が最初におっしゃった一人一人がそれぞれの感性で感じるということが大事だと。それは釜田先生のおっしゃり方だと、何か一連の考え方を与えられたときに、それに対して批判的に判断する、判断力だと。結局、個人個人が反応しなければ。バークランド先生がおっしゃったのは、何か教材を与えられたら、それに対して自分で言ってみる、相手が言っているのを聞いてまた反応してみる、そういうふうなことでしよう。結局、教育というのは最終的にはそういう個人個人が行動していくというかな。

寺川 バークランド先生の話はおもしろい

ですね。テキストの場合、講読で自分でつくった教科書を使うとしてもそれ以外にたえば、同じ作品の注釈書などいままものすごく多いんです。現代語訳を含めて非常にたくさんものを学生たちは見ることが出来ます。ですから、授業にそうした本のコピーを持ってくるわけです。授業では訳だけでなく付随してそこでは説明されてないことを補って説明したり問題点を論じるというような形をとります。そのときに、訳だけでなく、その付随する部分をどの程度まで聞いているかですね。私の本の説明と学生のもっている説明とに違いがあれば質問してくれと、そこが掘り上げられておもしろくなると思うのですが――私が求めないからかもしれないんですけど、あまりそういう点への反応がないです。先生がしゃべっているの間違っていると思ってるのかもかもしれませんが。表現の背後にどんな問題を含んでいるかということになれば、これは何ぼでも質問とか、あるいは議論とかできると思うのです。

演習なんかですと、従来の研究でいろんな議論があつてまだ解決してないところ、あるいは自分が疑問に思つたところについて調べ

させ、報告させる形をやるわけです。一応問題点や自分の興味を持ったことをきちつと調べてくることはします。ただ、さっき言いましたように、当番以外の学生がしないところが問題ですね。

さっき先生がおっしゃいましたけど、日本文学の研究について授業する場合も判断力とか問題点の発見とか、それを自分で解決していくとか、そういう自分なりの取り組みの姿勢が育つようにということは考えているわけです。それと、もう一方では文学を扱っていますから、ある種の感性を養っていく、言葉や表現に対する感性を、できる限り身につけてほしいわけです。ですから、日本文学の研究でも科学というところまではいかないかもしれないんですけど、わりあい合理的なものを考え、ある種の判断力を養つていこうというようなことを、一応みな心がけてはいるわけです。

岡田 いずれにしても、教育というのは一種の行動改革ですね。一人一人が自分の行動をある意味で改革していくとか、発展させるとかそういうことですから、一人一人に行動させなきゃどうしようもないですね。

教科書も改革を

バーグランド 教材について一言言うていいですか。さつき先生が質問したから。

岡田 ええ。

バーグランド 英語を教える面でまさに言葉なんです。私は文部省検定の教科書がわりに嫌いなほうなんです。一つはちやなもののしかつけれないから、これがまず嫌い。もう一つは原文を載せないのです。日本の英語教育のやり方は文法から教えていくんです。たとえば現在形とか現在進行形、過去形、未来形で、だんだん文法をふやしていくんです。その文法しか出ない文章を載せないといかん、原文としては。そしたら、もともとの立派な原文をその文法項目に応じて書きかえるんです。私は言葉というのはそのおりの言葉であるから力がある。まさに先生も日本文学を教えているからわかると思うんですが、言葉というのはその順番で、その言葉であるから力があるのです。私はよく日本人に聞かれるのは、「たとえば高校を卒業したときには、アメリカのどの年齢の子供に値しますか」って。それは答えられないんです。とい

うのは、知っている単語の数とか文法項目で言うと、日本の高校卒業生とアメリカの高校卒業生、そんなに変わらないんです。しかし、本当の言葉の力を感じる面では、日本の高校を卒業する子供というのは、アメリカの小学一年生に負けるのです。やっぱり言語というのは小学一年生、二年生が読む言語があるんです。ただ、小学一年生でも文法で分けているんじゃないんです。感じ方で分けているんです。小学一年生のものの受けとめ方と、高校生の受けとめ方は違うからね。外国語を教えるときには、できるだけどんな原文を載せないといけないんです。そこでは文法を中心にして教科書をつくったらだめなんです。文法ではなくて感じ方、中学生がどういこうとを感じ、どういうことに興味があるか。だから私は大きな教科書の改革を望む。特にいまの文部省検定制というのは、前例というのがすごく大事ですね。いままでつくった教科書、この教科書であれば文部省はパスしてくれると。そしたら同じようなものしかつからないんです。

岡田 それは大事なポイントだと思うんですが、語学の教室なんかでも、一つの教科書

を死守していくような時代ではなくなってきたと思うですね。複数の教材をかなり柔軟に教師の判断で教師がアレンジをして、結局一つのテーブルに、きょうは何と何とをメニューに乗せようかというように、教師が一回一回シェフになって、このお魚とこの野菜とというような感じで合わせながらやっていかないと——情報源はテレビはもちろんだし、外国放送も何もかもあるわけですから、そういうものをかなり柔軟に、エネルギーをかけてアレンジをして、そして提供して、そして一人一人の学生さんがそれに参加をして行動をして——行動する場が教室だというような感じを私は持っているんです。

語学のようなものは一人一人が行動しないとうにもならないもので、先生が言うのを聞くだけでは、できるようにならないですね。だから、教師のほうも、行動するのは学生たちなんだ、自分はそのアレンジをするのだというような感覚がこれからはないと、なかなか引きつけていけない——。

そうすると、大教室はたいへんな問題とさえば問題なんですけれど、私は五百人ぐらいの講義を持ったことがあるんですけど、毎時

間、クラスの前にB6またはB7の紙を何百枚も用意して配っておいて、そして私の話を聞きながら質問したいこと、もう一ぺん言うてほしいこととか、わからないこととか、反論したいこととかみな書きなさいと。そして教室を出ていくときに入り口のところに行くと。次の時間には必ずそれを整理して最初の十五分なり二十分なりとてね。そういうふうにししたら初めはなかなか質問が出てきにくいけど、そのうちだんだん質問が出てきて、入り口のところにかんりの質問がたまる。そうすると、何人もの人が同じ質問をした場合は、それがこの人たちの知りたい最も重要な点だということで、次の時間に少し時間をとる。そういうふうにしたことがあります。五百人ぐらになつたらそういうふうにしなないと、質問の場がない。いまの与えられた状況の中でも、工夫できることは一つや二つはあるんじゃないかということ、学生さんは意外と参加したがっているということです。

自ら学ぶ力を育てる

寺川 その意味では私なんか、今年の授業

では反省させられます。同僚には講読も演習形式で全部回して当ててしまう形をずつとやっておられる方もあります。質問なり疑問点なりきちんと出してくる。報告をきちんとしていくそういう力は持っているのです。それを育ててやる必要はありますね。ただ、一方で学生の取り組みに問題があつて、知識・理解という面での授業のレベルが下がつてしまつたために講義にしてしまつたところもあるわけですから。学生の学ぶ力を育てるということは重要なのですが、つい教えておきたいと思う知識を重視してしまいがちになります。

岡田 たとえばある大学のアメリカの先生が日本へ授業に来られて、九十分なり百分なりやる。そうすると、だいたいアメリカの学生なら途中で質問が出たり、学生の行きたい方向へある程度合わせていかなきゃいけないから、だいたい四、五十分分の講義を用意していつて、そしてあとは学生に合わせていくわけですね。ご自分の大きなストックの中から知識を出しながら。ところが、日本だとだれも質問しないし、何も反応が出ないから(笑) さつさと済んでしまつて時間が余るということをお笑いながらおっしゃったことが

あるんです。私がアメリカ人の学生さんたちに講義をすると、九十分なら九十分目いっぱい用意をしていつて、半分方いけるかな、三分の二いけるかなと思ひながら、ほとんど絶対に九十分分の話はできない……。

バーグランド 私も日本しか教えたことないから。この前、アメリカの学生に講義をしたんです。いつもと同じように自分できちつと用意して、ほんとに五分たつたうちに自分がしゃべっているうちに、「ちよつと待つて」つて向こうが言うんですよ。質問が出てくる。ぼくは五番まで用意してたのに二番の途中で、しゃべっている途中に平気で聞いくるんですね。

チャレンジさせる

岡田 教師が持つていきたいと思つている到達点と、学生さんに行動を任せただけの場合、学生が引つ張つていく場所とは必ずしも一致はしない。しかし、その柔軟性を教師も今後は学んでいかないと行動型の授業はできないし、その辺をさばくことはアメリカの先生たちにはうまいですね。自分の行きたい方向とあまりにも違う質問が出てきたら、パツと短

い答えをして「それは二週間先の話題だから」とかね。これがまたうまいわけですね(笑)。それは私たちも技術として覚えていかないと、学生さんに行動をとらせるタイプの授業ができない。

たとえば英語のクラスでも、従来ですと、この教科書を読むと決めたら、逆にいつの間にか、この教科書しか読んじやいけないような授業になってしまふ。だから、私はときどき好きなものを選んで読んできなさいと、ある枠を決めるのです。そして難しいものを読んだ人には、その分私はちゃんと努力を査定してあげます。やさしい短いもののしか読んでこなかった人にはその程度の査定しかしない。そうすると、一回目はどうしていいかわからない。二回目、三回目となってくると、だんだん興味のあるものにチャレンジしていく人が出てくる。チャレンジしない人も出てくる。だけど、評価してもらえらんだということになったら、頑張る人が出てくる。そして差が出るわけですね。差が出ちゃいけない、みんな同じでなきゃいけないというのであれば、それができないと思うんですが、どうですか。

バーグランド 選択問題で合わないものにベケをつけないといけないのが教科書に出たのです。四つのがテレフォン、ブックケース、チェア、テーブルが出たのです。だいたいの子がテレフォンとやったのね。私が「ほかに答えありますか」と尋ねてもその質問の趣旨がわからないんです。生徒には答えというのはいっしょかないと思っています。よくはブックケースを選んだのです。なぜかというと、うちの電話の置いてある部屋はテーブルといすと電話があるのですが、ブックケースはその部屋にはないんです。場所を考えることもできる。またはいろんな考え方がありと示しますと、一人の生徒は手を挙げて「チェア」。「音節しかないから」(笑)。「そのとおりや」と言うね。ほかの考え方もあると言う。そしたらみんなものすごく楽しんで、そうかそうかいいろんな考え方があつた。まさに生徒はやりたがつているんです。学生はやりたがつているんです。

岡田 そうですね。行動したがつているということはありますね。だから、教科書も柔軟に一律でないものにしなくちゃいけない。それから、教授法もやはりいろんな方法を考

えていなくちゃいけないということだろうと思うんですけど、かなりコントロールがしにくくなつてくる。

「迷いの心」を育てる

釜田 そういうことです。結局、いまおっしゃったように、法律の学生でも正解が一つだと思ひ込むときがあるのです。ある問題に対して回答が一つだと。だから、正解はどれかということを求めるんですね。正解というものはいっじゃないんですね。法律の場合、特に多様な回答があるわけです。それがとにかく相争つていふわけです。それをごまかすために、法律の世界は通説という言葉が生きていふのです。通説とは何ぞやということがまたあるんです。ですから、本當言うたら学生は迷いに迷つて回答が多様にあるという迷い、頼りないもんだということをわからせることが教育効果があつたことになる。

バーグランド それは認めていいということですね。

釜田 これもある、あれもある。そうすると、何と頼りない、正解はどれか、どれがマルかというわけです。特に法律は文章で書い

である——ほかのものも文章で書いてありますけど、ルールですから文章に書いてあるからはつきりしていると思っっている。これはたとえ憲法でもあいまいな部分、はつきりしてない部分がたくさんあるのだと言うと、何て頼りないことを言っているのかということになる。はつきりと、これはこれ言うてほしいんですね。

岡田 もつと極端なのは、正解だけ早く教えてくれな。それだけ覚えてきますからというようなものもありますね。

釜田 だから、大学の場合、逆に言うと、大学教育の成功というのはあれかもしれない。そういうような迷いの心を十分に身につけさせて出すということかも。

岡田 その中で自分を発見して。

バーグランド 英語もまさにそのとおりですよ。

岡田 そうです。単語の意味は一つしかない。この英語の単語と、この日本語の単語はぴったし重なっていると思っっているわけ。そんなものの絶対ないんだから、それはそうでしょう、古典でも全くそのとおり。

寺川 古典でもそうです。そのときにもう

一つ問題になるのは、たとえば有名な人の書いた注釈書、えらい先生が書いたんだからこれの方が正しいと、あるいは辞書に書いてあることは正しいと学生は考えているところがあるのではないかと思います。しかし、意味というのは文脈の中での意味でしかないわけですから。それをどう理解するかは、その前後の文脈とかかわり、とらえ方によつて極端に言えば人によつて全部違つてくる。絶対的なものでなくて、自分がそれをどう読みとるか。なぜそう読むのかということがわかればばくはいいと思うんですね。

バーグランド それにやつぱり私たち人間としては、そのものと自分との関係を考えたいんです、本当は。それを感動したい、感激したいんです。だから、学生というのは正解じゃなくて、自分が考えさせられた自分の注釈というものを本当は発表したいんです。出したいんですよ。授業はそういう場でないといかんですよ。だから英語の場合は、特に文法的には正しい文章と、結局、人を動かす力のある文章というのはイコールの場合ももちろんあるんですよ。でも、そうじゃない場合もあるのです。全く文法的には正しいのです

が、英語としては何を言おうとしているのかわからない文章は幾らでもある。また逆に文法はめちゃくちゃですが、聞いた人は感激するという文章は幾らでもある。

岡田 それはそうですね。

いろんな話題が出たと思うのですが、一言ずつまとめというか、将来の授業はこういうことを目指して努力を重ねていくべきだ、というようなことがございましたら、一言ずつおっしゃっていただけるとありがたいのです——。

いま教師の柔軟性が問われている

バーグランド 私は自分がだんだん年をとつて、年をとると狭くなりぎみなんですな。

決まっていままで自分のやり方というものがあるから。だから教師として授業のいちばん大事なことの柔軟性、ほかの人が何をやっているかをまず見る。ほかの人の授業の持ち方、教え方というのは違うから。きょう、ほかの先生——寺川先生、釜田先生からいろんな吸収をして、ああ、そうか、こういうこともある。だからそういう授業を持ちたいですね。いわゆるこれが理想的な授業だ

から、ずっとこれを維持していいこうではなくて、その時代、またはその学生、その生徒に、その場にに応じてできるだけ立派な授業をして、そのためにはほかの人から吸収していいこうという、それが教師としていちばん気をつけたいといけないところではないかなと、きよう思いました。

寺川 私も様々な授業を受けてきました、すでに自分の型ができてしまつて、なかなかそこを抜けていくのが非常に難しいんですね。自分の努力が足りないということなのですが、ただある場合にうまくいったとしても、たとえば同じ植物を同じ条件をつくって挿し木しても、挿し木したはずなのに、つくときとつかないときとあるというああいう感をいつも持つています。これはうまくいったと思つて、それをもう一度繰り返し試してみても必ずしもうまくいかない(笑)。その年によつて学生の質はそれほど違わないのですが、関心のありようとか、その対応の仕方とかいろんな微妙ですね。しかし、私はことしはこういうふうにやつていいこうと思つてやりかけてしまつと、それを途中で変えられない。結果として、ことしはどうもうまくいってないな

という感じを持つ。そういうことの連続のよう

学生を魅了できるか

釜田 そうですね。何百人という学生を一人一人見ますと、なかなかいいんですよ、個別に話してみますと。それが同志社でどのクラスでもいいんですけど、どこかの授業を通じていままでにないある非常に重要なものを得たということですね、何かヒントを得るとか、その子の持つているいままでの経験全部がプラスになつて花開くような、なんかそういう授業ができたいと思うのです。その子に刺激を与える、ヒントを与えるといひますか、それがあとではね返つてきて対話ができたらもつと理想的なんですけど、それはちよつと時間数で言いますと少ないですよ、ね、対話をやる時間数というのは。大クラスでもばくは自分の学生時代から振り返つてみまふと、大クラスを通じて得たこともあるのだすよ。それは人数が多かつたとか少なかつた

ではなくて、その先生の影響力なんです。大きな教室でマイクを通じて後ろのほうで聞いた講義でも、いまだに記憶に残っている。逆に小さいクラスであまり印象に残つてないのもあるのです。小さいクラスであつたにもかかわらずね。あまり今日までに残つてないということあるのです。そうすると、最後は自分の反省だけに尽きるのです。自分が至らないから学生を魅了できないんだなというね。それを何とか解かんといいかなと思ひながら悩んでいるのですけど。しかし、何とか学生諸君を育てたいですね。全員が同志社へ来てよかつたと、どこかのクラスでそういうものを得たという気持ちになつて出てくれるような授業ですね。自分もそのどこかに参加できればいいと思つてゐるんですけど。

そのために技術的なことはばくは工夫すれば幾らでもできると思ひのですけど、能率を上げるとかそういう――。ただ、最後的には学校というものにおいては、人の接触だけが残るのぢやうね。人と人との接触、それ以外のことはいまは全部代わつてできますから。本もたくさんありますし、テレビもありまふし、学校へ来なくても幾らでも知識量は

増えてきますよ。最後に残るのは人間の接触ですよね。人格的な接触ですから、確かにさつきから対話をする場というそういう時間数をもっと思い切ってふやしてしまうかですね、授業の数をもっと減らすか何かしまして、そういう時間数を倍ぐらいにしまして、ゼミナール形式のようなものを。いまはゼミは一つですけど、もっと複数とれるようにするとかして、たくさんの先生に接して、いろんな角度から刺激を受けるという場を思い切って増やすとか。大学もこれ、変えたほうがいかもしれませんか。これは昔のパターンですよ、日本のね。テレビもなかった、教科書もあまり出てなかった、本もあまりなかった時代のね。

岡田 知識を得るチャンネルが限られていた。

釜田 そうです。チャンネルが限られていた、明治以来の伝統が残っているのですよね。戦後になってもあまりその辺の改革はなかったんじゃないでしょうか。

岡田 それは書物がなかった時代の知識教育です。

釜田 思い切ってガラッと変えてしまった

ら能率が上がるんじゃないか。なかなかみんな変えることに不安がありますからね。だけど、いま文部省でも、大学教育の特に一、二年教育を大学の自主的な判断に任せようじゃないかということを言い出しましたよね。ということとは、これでないといかんという像がもうなくなってきたわけですよ。いい時代ですよ、いい意味では。ぼくはチャンスだと思うのです。同志社はこれだけの伝統がありますから。そして海外の大学との関係がありますから、これを活用してガラッと変えてしまうのもいいことかもしれません。

大学の専攻は入学後に

バーグランド 判断力を身につけるためには大学でお願いしたいのは、アメリカと同じように、専攻を決めるのを入れる時点じやなくて、だいたい一年置いて二回生から専攻——いわゆる魅力的な授業というのは、進んで自分のほうから受けて、自分が何を勉強したいかでいろんな先生を見て、そこで出会いというものが大学の中で必ず出てくると思うのです。

バーグランド 特に模擬試験ばかり重ね

て、自分がどこ入れるかを見て、入りたいところじやなくて入れるところを見て。

寺川 ぼくが入学したのは文学部で、学科までは決まっていませんでした。

バーグランド 専門は後で決める。

寺川 専門は一年半後の決定です。最初は日本史か社会学のどっちかやろうと思って入ったんですが、実際には国文、上代を選んだのです。教養時代ある先生の授業を受けて、『万葉集』をやりたいと思ったのが一つの発端で今上代文学をやっています。ただ、その途中は揺れていて国語学・近代文学もやりました。大学に入る前の受験生から見ると、どの大学にどんな先生がおられるとか、どういう授業がされているかは一切わからない。そこで知名度と偏差値で自分の入れるところに大学の授業で何が行われているか知らないままに入る。その点で言うと、入ってから選択できる余地をつくってやったほうがいいかもしれない。大学院に行つて思ったのは、私学で早くから学科を決めてやっている人たちは、たしかに専門の力が非常に進んでいる。しかし逆に言えば、非常に狭い分野ですすぐれているが、必ずしも視野は広くないと思つた面

もないわけではなかったですが。そういう点で言えば、入学のときはせめて学部くらいまで、あまり細かいところまで分けないで、自分の興味で選べせるというのが、大事なことでないかという気がするのです。特にいまみたいに受験体制が厳しくなってくると、よいそういう必要があるのじゃないかという気がしますね。

教育には時間がかかる

岡田 なかなか教育というのは、正解がない(笑)ということですよ。これさえすれば成功するというそんなものはないんです。

釜田 やはり時間をかけないといかんですね。時間がかかりますよ。本当にやろうと思ったらものすごく時間を費やさんと、学生を本当に鍛えようと思っただけでいいですよ。もし大学がそれだけの時間がないと言うのであれば、どこか代わってそれを費やさんといかんわけです。だれかがしなくちゃいかなんですよ。だから教育はそういう意味では、時間と経費というのがものすごくかかるんじゃないでしょうか。

岡田 そのためにはやはりカリキュラムを

整備しなきゃいけないし。あれもこれもやらなきゃいけないようになる。

バーグランド それは、最終的には生き方と同じように、正しい生き方があるんじゃないかと、一人一人の人間の生き方がある。だから、授業の持ち方もやっぱり一人一人の先生の……。カリキュラムをどう変えても、教室をどうきれいにしても、最終的には一人一人の先生がどういう授業を持つ、それだけの――。

岡田 そうしてできればそういうものをざっくりばらんに話し合って、一人一人がどんな方向で努力しているか、お互いの……。

バーグランド 特に一貫教育の中で。

岡田 話し合う場が常時あると、孤立して努力するんじゃない、みんながいろんな方向で努力しているという、コミュニケーション意識というか、学生さんは一人の教師で育つんじゃないんだから。お互いに同僚同士が学び合うことができたらいいと、そんな気持ちなんですけれど。

(一九八九年十二月二十六日収録、於有終館担当理事室)

